船場の女

花登筐

船場の女

昭和四十九年四月二十日　印刷
昭和四十九年四月三十日　発行

定価　六八〇円

著者　花登　筐

編集人　浜田琉司

発行人　朝居正彦

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇三　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町

印刷　東京ベル印刷

製本　正文社

0093-400099-7904

船場の女　目次

生漉はん
古手屋おしん　六一
鶴亀後家　一〇三
卍（まんじ　ともえ）　一五三
おお いきって いきって　二〇一

裝幀山高登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生

漉

は

ん

一

乾き切った真夏の船場の道は、人の足音だけでも、砂埃が、舞い上がりそうである。
ましてや、人力俥が通り、大八車や、牛車が、荷を積んで往復するのだから、堪ったものではない。
砂埃が舞うと、両側の店から、丁稚が、待ちかねたように飛び出して来て、手桶の水を撒く。
埃は、それで治るかのようにみえるが、見ている間に、水を吸いとって、乾き始める。
こうして、水と埃で固められた道は、余計に乾からびて、乾いた砂埃を舞い上げる。
そんな真昼の船場の道を、日傘をさした女がひとり歩いていた。
まるで、牛の涎のように、のたのたと、歩いているのか、とまっているのかわからない。
いや、歩いている証拠には、右足と左足が、交互に出ているから確かである。
だが、その歩幅の狭いこと、ほんの僅か、しかも、女にあるまじく、外輪を向いて、足が出ているのも、何となく滑稽な姿である。
と言っては、酷かも知れない。
この女のせり出した腹を見れば、それも已むを得ない。

もう七カ月か八カ月、それにしてもでかい腹である。
水を撒きに出た丁稚が、その女の歩く姿を見て、店の中へ声をかけた。
「おい！　生漉はんの土俵入りが始まるで……」
この声も聞こえている筈なのに、女は苦しいのか生汗を顔ににじませながら五、六間歩くと、立ち止まって一息入れる。
そして、今度は、その腹を、片手で抱えるようにして、また、一歩を踏み出し始める。
成程、その姿は、横綱が土俵入りをしているかのように見られなくもない。だが、この女のことを深く知らぬと、土俵入りの意味も深くはわかるまい。
この女の名はいち、南船場は、安堂寺橋通り、紙問屋越前屋当主清之助の妻女である。
越前屋は、初代が越前武生より和紙を行商に来て、創りたる店である。
紙といえば、昔から美濃とされているが、越前和紙も上質和紙として著名である。
礼式包装用や、紙幣用紙の檀紙から、辞令用紙や、高級封筒用の厚紙、さらには、高級襖の上張用に知られている鳥の子紙、と種類は多いが、なかんずく、奉書のなかでも大奉書と呼ばれる目録書などに使われる生漉紙の、最高級紙の産地も越前である。
現当主清之助は三代目に当り、いちが嫁に来たのは七年前、明治十五年二十歳の時である。
いちは、同じく船場横堀にある材木問屋木田屋忠兵衛の末娘であった。
木田屋は、船場草分の家柄で、先祖は、船場惣年寄まで勤めた老舗でもある。
いちが子供の頃は、横堀に置かれる材木は、ほとんど木田屋の材木と言われるくらいで、本来なれば、僅か三代の歴史しか持たない越前屋へ嫁に来るような娘ではなかった。

それなのに、格下も格下の越前屋へ嫁に来たのは、いちの代になって、木田屋の身代が傾いたためである。

木田屋の身代の傾いた理由を詳しくは説明する必要はないが、跡取り息子の二太郎の不慮の死が原因となったと言えよう。

木田屋には、子供が女ばかり続き、いちはその三女、三女にしていちなる名前がついたのは、三番目に生まれたのがまた女とあって、さすがに忠兵衛夫婦も落胆していたところ、信心の生駒毘沙門天より「落胆すべからず、この三女を始めて生まれた子と信じ、一姫、二太郎の譬にあやかるべし」との教えがあり、三女をいちと名付けたのである。その甲斐あってか、次いで男子が出産するや、木田屋は二太郎と名付けた。

二太郎が、横堀に浮かべてある材木の上で遊んでいて、転んで水中に落ち、溺死したのは十二歳の時であった。

材木問屋の伜が、自家商品の材木から転んで水死したことは、忠兵衛にかなりの打撃を与えた。

忠兵衛が、以来、息子を偲び、横堀に材木を浮かべることを許さなかったことも、家業に響いた。

その頃、長女のぬいは、既に嫁に行き、次女のせいに、婿養子をとったが、その婿が、子を宿らせる間もなく病死したことも、またも忠兵衛の打撃となった。

次女のせいの婿養子が、死亡すると間もなく、今度は、長女のぬいが、離別されてきた。

そこで、ぬいとせいとの相続人争いが、生じた。

婿を迎え、木田屋の跡取りの嫁になったのだから相続人だと主張するせいと、実家へ帰って来たからにはと、長女の資格を主張するぬい——。

こうして暗い日々が続き、忠兵衛は、どちらを相続人と決められず、中気の果てに死亡した。
その時はもう相続人を決める必要もないくらいに、木田屋は落魄していた。
越前屋清之助といちの縁談が起こったのは、その頃である。
家柄と、老舗を第一に見る船場では、越前屋が、格を上げるためには、腐ったとはいえ鯛、木田屋の格が、必要であった。
越前屋では、いちを迎えるために、当時としては、破格の百円という結納金と、新世帯の住む、離れ家を庭に一棟建て増したというくらいだから、いかに木田屋の格が高かったことがわかるであろう。
事実、いちの嫁入りの日、いちの母のとしは、
「おいち、世が世であったら、こんな、じじむさい嫁入りをさすんやないのに、堪忍してな」
と、謝罪し、こう付け加えた。
「けど、おいち、嫁に行った以上、ぬいのように、戻って来るようなことは、あってはなりまへんで。辛抱が第一、もしぬいが、戻って来なんだら、お父さんかて、まだまだ寿命があったやろ。それに、嫁に行ったからには、どないなことがあっても、やや子産みなはれや。もし、あのせいが、子供産んでたら、木田屋の身代は、こうも落ちなんだやろ。いや、同じ子供産むなら、先に男の子産みなはれや。もし、このわてが、先に男の子産んでたら、木田屋も、お父さんも、まだまだ盛んな筈……ゆめゆめ忘れてはなりまへんで」
としがその三つの訓えを、三度繰り返したのは、余程、身に応えていたからであろう。

2

いちが、越前屋へ嫁入りして来た時、舅に当る二代目清兵衛はまだ存命中で、自ら花嫁の前へ出て、

「どうじゃ？　まるで、生漉のようなお嫁さんやないか？　清之助、皺にならんように大事に使いや」

と、花婿の伜に言って聞かせた。

事実、いちは、顔立ちこそ平凡な娘であったが、肌の色は抜けるほど色白であった。

三歳年上の清之助は、そんな花嫁のいちを見て、言葉も出せぬほど喜びにうち震えていた。

なにしろ、嫁を捜すのに五年間もかかり、いちとの話が出るや十日目に祝言という、異常な速さで貰った嫁である。

清之助が嫁を貰うのに五年間もかかったのは、べつに清之助の身心に異常があったわけではない。

清之助は、越前屋が、かなり大きくなってから生まれた子供である。

ことにご維新から、新政府が樹立されて大阪府が生まれ、諸行政機関が設置されると、辞令用紙、文具用紙などがやたらと要った時代である。さらに、大阪に造幣所が誕生するや紙幣用紙も必要となった。

それらの公用御用達問屋として、越前屋が真っ先に名乗りをあげたのは、やはり初代、二代目の才覚でもあったが、越前和紙の力も大半を占めていた。

加えて、時代の流れが落ち着き、文明開化の世となって、人々が家の装いを新しくしようという時でもあった。

当然、和紙の需要が多くなる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

公私の需要で越前屋が急速にのし上がって、財を築いていったのは当然である。
いちを嫁に迎える時には奉公人も店で十二人、女子衆も四人もいた。
そんな越前屋の主人の子に清之助は生まれたのだから当然ぼんぼんと呼ばれて普通なのに、清之助は呼ばれなかったのがそもそもの原因の始まりである。
越前屋の隣に、京佐屋なる袋物問屋があった。小さな問屋で、奉公人の数も少なく、大した店ではなかった。
その問屋にお糸なる娘がいた。清之助より二歳歳下であったが、近所でも評判の美少女で、
「あのいとはんは、今に、鴻池はんからお嫁に貰いに来なはるで」
とさえ噂をされた。鴻池家は、淀屋と並び大阪商人の筆頭、神格化されている大豪商である。
清之助は、お糸とは幼馴染であったが、お糸が、みるみるうちに美しくなっていくにつれて、恋心をつのらせた。
と言って、清之助は、お糸にそれとなく口説いたり、付け文を渡したり出来る勇気もなかった。だから清之助のたったひとつの歓びは、お糸が毎日稽古事に行く時間になると、店の表で荷造りをしているふりをして、その姿を見送り胸をとどろかせたり、たまにお糸と目が逢って、お糸が微笑んでくれたりでもすると、清之助は、お糸も想ってくれていると、ひとりで思い込んで胸を熱くさせる程度であった。
そのお糸の嫁入りが決まったとの噂を聞いたのは、お糸の十七歳、清之助の十九歳の春である。
清之助は、それを聞くと、カッと頭に血を上らせた。
ひょっとして、このわしが想いを打ち明けないので、あきらめて嫁に行くのではないか、それなら

ば、わが想いを打ち明ければ、断わってくれるのではないかと、この時ばかりは奮起して、やっとお糸の生花の稽古の帰りに呼びとめた。
「お糸さん。あんた嫁に行くんやてな」
「そうや。ほんで、何か用？」
「いや、実はな、あんたとは、小ちゃい時から知ってるし、わてが、嫁に来てほしいなあと思ってたのや……」
　思い切って口に出した途端に、お糸は、奉公人に訓えるように、
「清之助はん。縁ちゅうもんは、それぞれ格があわんといかんのや。そら、嫁に行くもんは、格下のとこへ行くこともあるけど、そんな娘はんは器量が悪いとか、何か理由がおますのや。このうちに、べつにそんな理由はおまへん」
　みすみす、あんたの店は格下だと言わんばかりのお糸の口調に、清之助も思わず、
「そんなら、このわいとこが格下や言うのかいな？」
「さあ。格は、世間さんが決めはるもんですさかい……。ただ、はっきりしてることは、あんたを誰もぼんぼんとは呼んではらしまへんやろ。そら何でですのやろ？」
　お糸は、冷たい視線を向けたのである。さすがに清之助も口惜しくなって、
「そやさかい、格が下や言うのか！　わいとこは、あんたとこより店も大きい、奉公人の数も多いで……」
「店の格は、お金やあらしまへん。お金で格が決まるのなら、高利貸は格上だすやろ」
「そんなら何で決まる？」

「出生だすやろ」
「出生？　わいとこが、越前の出やいうことか？　そんなら、あんたとこかて、丹波の出で、先祖は百姓やったんやろ」
そこまでは、よかったが、後がいけなかった。
「先祖の出生と違います。代々の御寮さんの出生で格が決まるんだす。うちとこの祖母は、高麗橋の水田屋の娘だす。母は、順慶町の桐屋の娘だす。あんさんのお母さんは、船場のどこからお出でだす？」
それを言われては、返事は出来なかった。
「格ちゅうもんは、ええとこからお嫁に来てくれはるか、来てくれはらへんかで決まるんだす。うちが、今度嫁く、唐物町の唐物問屋、唐船屋はんも、唐物町きっての格のある問屋だす。その唐船屋のぼんぼんが、京佐屋のいとはんと夫婦になる。それが、ふさわしい格と違いますやろか……」
お糸は、それだけ言うと賤しみ者を視るような目で会釈をして去って行ったのである。
それが、清之助が、娘時代のお糸と逢った最後の言葉であった。
清之助の受けた打撃は大きかった。
始めて知った格なる存在のために、清之助は泣かねばならなかったのである。
しかも、その格は、母のかねが下げていたのである。
かねは、越前屋が、この船場に店を出した頃、初代の清兵衛が折角創めた店を潰さぬために働き者という理由だけで、わざわざ二代目のために故郷の武生から貰った嫁である。
いわば、創設期に、まず役立つ女ということだけで迎えた嫁で、格や、家柄の重要性なども知らな

かったし、また知る余裕すらなかったのであろう。
事実、かねは、働き者であった。
ことに、北陸の人間は、水に強い。
京の堀川の友禅屋の水洗いは、殆どが越前の人間だし、京、大阪で風呂屋を営むのは、隣の加賀の人間——。
ましてや、紙漉き屋の娘とはいえ、家内工業、一家あげての仕事である。だから、かねは幼い時から、水に馴染み、妹を背中に負いながら、飯炊きの手伝いから、紙漉きまでやらされて育ってきたのである。
その代わり、働くことだけが取り柄で、後は、何の行儀作法も知らないただの田舎女であった。ましてや、世間の交際など出来る筈はなかった。現に四人の女子衆が来ても、未だにかまどの前から離れぬぐらいで、女子衆達も当然そんなかねを御寮さんとも呼ばなかった。
その母のためにも格が下がり、自分までが、ぼんぼんと呼ばれぬと始めて知った清之助は、泣くに泣けなかった。
「お父はん。なんで、もっと、ええとこから貰わなんだ？」
父の清兵衛も、その頃になりようやく格の大切さに気付いていたらしく、
「そうや。わいも死んだ親父を恨みたい。けどな、あの女がいんかったら、お前が生まれてへんのや。それに、あの女は、働きもんや。女子衆二人分は、助かると思うて辛抱せんと……」
弁解とも、自分に言いきかせるともつかぬ口調で言うと、これだけははっきりと、
「その代わり、お前の嫁だけは、わいの分まできっと格の上のとこからもろたる。ただし、ひとつだ

け言うとくぞ。そんな娘はちょっと、顔かて不細工になるかも知れんで。それは、文句言うな」
「かまへん。どんな不細工でも。うんと格上の娘もろてや、唐物町の唐船屋よりもな」
清之助の心に必然的に生まれた劣等感は、異常な程に、格上の娘への憧憬となっていったのもお糸に与えられた打撃のせいであろう。
それからの五年間は、清之助にとっては、焦れに焦れた年月であった。
父が約束したものの、そんな縁談の相手は、現われなかった。
起こる縁談は、格下ばかり、その上に、隣のお糸は、これ見よがしに婿の唐船屋の若旦那と、月に一度は、実家へ訪ねて来る。その仲睦まじげな姿を見ても清之助の心は煮えた。
そんな折、木田屋のいちと縁談が起こったのである。
「その木田屋て、唐船屋と、どっちが格上や？」
と聞き、木田屋が、遥かに上と知ると、その日のうちに、清之助は、清兵衛に承諾の返事をさせ、翌日には、結納金を仲人の家へ届けに行かせた程である。
こんな思いを籠めて貰った花嫁のいちが、父の言ったように不細工どころか、十人並みの顔立ちに生漉のような肌白さと知り、清之助は祝言の盃をあげながら、歓びに体を震わせたのも無理はなかった。

3

さて、祝言の三々九度の盃もすみ、ほっとした清之助に次なる心配が訪れた。
次なる儀式の親戚の固めの盃となって、いちの母のとしが、始めて清之助に挨拶をし、やや高飛車

に、

「小さい時から、やわい子で、どうぞ大事に扱うてやっとくれやす。娘が逃げ出すような目に逢わせることだけは、かんべんしてやっとくれやす」

としにすれば、不縁になった長女のぬいの言い訳もあって言ったのだが、劣等感に悩む清之助はそれだけでまた心配になってきた。

(逃げ出すような目て、どんなことがあるやろう)

そこでハッとしたのが、初夜の床のことである。格上の店では、それなりに作法があるのではないかと考えたのである。

清之助も男、廓へ行って女郎買いは、何度となくやっている。

しかし、女郎の抱き方を、格上の老舗の娘にしては逃げて帰るに違いないと思うと、清之助はまた、あのお糸の下賤者を見るような視線を思い出して、冷汗を腋の下ににじませたのである。

「お父はん、相談があるのや」

清之助は、披露宴の席から抜け出すと別室へ父を呼んでひそかに、その方法を聞いた。

「さあ……」

父の清兵衛も、さすがに困った様子で、ピシャリと扇子を閉じて、考えていたが、

「お前の母親は田舎もんやったさかいに、かねの時の逆をやったらええのと違うやろか、つまりお前の方が、嫁さんにみんなまかせますて態度で出た方が、この場合、作法にかのうてんのと違うやろうか?」

「けど……けどや……なあ、恥かくとかなわん、誰かに、聞いてくれへんか?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com